

【厚生労働大臣賞：中学生の部】

「共に歩める世の中に」

山梨県・北杜市立甲陵中学校
2年 安富 美佳 さん

今年の正月を過ぎた頃から、私は家の前の歩道を朝早く盲導犬と一緒に散歩しているお婆さんの姿を見かけるようになった。きっと今までもお婆さんは、早朝の散歩をしていたのだと思うが、私と会うことはなかった。だが、私が中学生になったことで登校時刻が早くなり、散歩を毎日の日課にしているお婆さんの姿を見かけることが多くなったのだと思う。私の家は国道に面していて、通勤通学時間にもなると、車のとぎれることのないくらい交通量が増える。きっとお婆さんは、交通量の少ない朝を選んで、盲導犬と一緒に散歩をしていたのだと思う。

家の前は国道とは言え、歩道は段差があり街路樹は伸び放題のところもある。歩道の幅も、さほど広くない。街路樹によって地面が隆起している場所もあり、普通に歩くのも容易でない所もある。ましてや、自転車がかなりのスピードで通り抜れたりすることもあり、子供やお年寄りにとって、安全な道とは言えない。交通量や歩行者の特に多い街中では、点字ブロックや音の出る歩行者用信号機が設置され、整備されている。使用する人々に優しい街づくりになっているのに比べると、利用者の少ない地方ではまだまだ整備が行き届いていないのが現状だ。見えない所に手を差し延べることのできる行政であってほしい。

数日前のこと、私は図書館へ行こうとバス停で待っていたとき、盲導犬のお婆さんと偶然一緒になった。私はお婆さんのことを知っているが、お婆さんは私のことは知らない。私が声をかけようか迷っていたとき、バスがきてドアが開いた。

「リフトを下げるので待って下さい。」

と、運転手さんの声がしてステップが下がった。お婆さんは段差なく盲導犬と一緒にバスに乗ることができた。運転手さんのさりげ無い行動に促されるかのようにならぬように私も

「あの一。前の方が空いていますよ。」

と自然に声を掛けていた。そんな自分に私自身が驚いてしまった。

「ありがとう。ここ大丈夫かな。」

「大丈夫ですよ。気を付けて。」

ほんの数秒のやりとりだと思うが、とっっても長い時間会話をしていたような気がした。視覚障がい者と身構えていた自分が、なんだか恥ずかしく思えた。駅に

着いたバスは、ゆっくりとステップを下げた。誰もが優しい気持ちでバスを降りることができた。

「私、改札口に行きますが、お婆さんはどちらまで行きますか。」

何だかずっと前から話しができていたみたいな気になった。改札口を抜け、階段を上りホームまで一緒に行った。階段を上りながらお婆さんは何度となく

「ありがとう」

と繰り返し言っていた。私はバスの運転手さんの一言に背中を押されて、ちょっと勇気を出しただけなのに、特別なことをしたわけではないのに。でも、ほんの少し前までの私は、障がいは特別なことと壁をつくっていた。みんなが必要なときに、さりげなく手を差し延べあえる世の中。見えない所に気を配り助け合える世の中。それが障がい者と共に歩む障がい福祉だと考える。

私は、家の前の歩道を狭くしている雑草を父や母と一緒に取り除いた。街路樹の枝を切ってもらった。私にできることは、ほんの小さなことから一歩ずつはじめたい。特別なことではない。自分と自分を取りまくまわりの人達のために。

盲導犬と一緒に毎朝散歩しているお婆さんに会ったら私の方から声をかけてみよう。

「おはようございます」

と。なんだか明日の朝が待ち遠しい。